

# これからの社会

IPA顧問 学校法人・専門学校HAL東京 校長

鶴保 征城(つるほ せいしろう)

戦後の日本は、1990年頃まで成長社会が続いた。とくに、1960年代は今の中国も顔負けの年平均10%近くの高度経済成長を実現したが、1989年末にピークを打ち、その後成熟社会に入ったと考えられる。

成熟社会の特徴は、「一般物価が持続的に下落する」デフレ現象であるが、これについては、SEC journal 30号「デフレからの脱却」で述べた。当初は、10年程度の循環で回復すると期待されていたが、実に20年近くもデフレ状態が続いている。こうなると、社会が変質したと考えざるを得ない。

成長社会は、発展する経済に牽引され、物価も組織も右肩上がりである。映画「ALWAYS 三丁目の夕日」で主人公が沈む夕日を見ながら、「明日は今日より良くなるよね」「当然だよ！」と素直に言えた時代だ。

このような社会は、やるべきことがほぼ決まっていた。国のレベルでは「米国に追いつけ・追い越せ」、会社のレベルでは「売上高アップ」、家庭では「とにかくマイホーム」。言い換えると、「正解あり」の社会である。問題は決まっている。答えも何通りかの中に正解がある。求められるのは、それを早く正しく解くこと。選択問題を解く処理能力が問われていたとも言える。

一方、成熟社会は経済成長が止まり、物価は下がり組織も縮小する。やるべきことは明確ではなく、何が問題かを考え設定することが重要になる。「正解なし」の状態で、単純な情報処理ではなく、情報を結び編集し、試行錯誤の中から問題を浮き彫りにする能力が問われる。

ゴルフに例えると、成長社会は、快晴・無風で平坦なゴルフ場。成熟社会は、風雨・霧でブラインドの多いゴルフ場と言えるかもしれない。グリーンが見えなくても、とにかく打たなければならない。リスクは多いが、打たなければゴルフにならない。

登山で言うと、登りは天候を見て一気に登れるが、下りは天候を選ぶことは出来ず翻弄されるのに似ている。事故は下りに多い。

求められるスキルを考えてみよう。成長社会では、選択問題を早く正しく解く頭の回転の速さが重要になる。これは測ることが可能で、偏差値というものだ。だから、高偏差値人間が重宝された。

成熟社会では、何が問題かを考える「頭の柔らかさ」が求められる。いきなり答えを求めるのではなく、お互いにアイデアを出し合うという作業が先行しなければならない。アイデアが最初からシュリンクしたのでは、大した成果を期待出来ない。最初はまともでなくても良いから、ワイガヤ的雰囲気豊かで豊かな発想を出し合うのが良い。

本稿では、「成長社会」との対比で「成熟社会」という言葉を用いたが、日本社会が隅々まで成熟し切っているわけではない。むしろ、政治、経済、官僚機構、企業統治、グローバル化、教育、外交、地方分権等々、まだまだ未熟な分野が散在している。人間そのものも成熟化に向かっているというよりも、未熟化しているかもしれない。「未熟」ということは、まだまだ改善・発展の余地があるということだと思ふ。